

合コンで再開した

俺様消防士

一緒に閉じ込められたと

トイシで

それ

クリ責めクンニ

中出し

で

される話

ラブムラ

119
FIRE DEPT.

FIRE DEPT.

合コンで再開した俺様消防士と一緒に閉じ込められた
トイレでムラムラされてクリ責めクンニで中出しされる
話

美波（みなみ）：私。しがないOL。女性ばかりの職場で出会いがない。周りは結婚に出産と、女の幸せを次々とゲットしていて焦っている。

多田 泉（ただ いずみ）：三二歳。消防士。二年前に消防副士長に任命された。口が悪く、ぶっきらぼう。人をからかって反応を見るのが好き。一見すると冷たく見えるが、消防士としての責任感は強く、実は誰よりも周囲をよく見ている面倒見のいいタイプ。女性に媚びることもなく、自分のペースを崩さない。

普段は余裕たっぷりなのに、好きな相手を前にと意外と不器用で——？

「今日、合コンなんだけど来ない？ こっちの人数足りなくてさ〜！」

「え、まじ!? 今日!? 行きます行きます!」

友達綾香からのその誘いに食い気味に答えたら、電話越しに笑われた。他の参加者は私とは全員初対面らしい。それを聞いて、逆に気が楽になった。今日は誰に何を思われても関係ない。マウントも黒歴史も語られない。絶好の男漁りチャンス!

まわりの友達は気づけば次々と結婚し、子供を産み、それぞれのセカンドライフへ進んでいった。おめでとうと笑いながら、内心では焦りが募る一方だった。婚活パーティーもマッチングアプリも一通り試したけれど、これといった出会いはないまま歳だけを重ねている。さすがにそろそろまずい気がする。今夜の合コンで、絶対に何かしらの手応えを掴んで帰ってやる!

そう意を決して、ゴリゴリに気合の入ったワンピースに着替える。鏡の前でひと通り身支度を整えて、香水をつけて、あとは家を出るだけ、というところで、

ふと思いついた。

ゴミ出してから行こう。ついでに、指、寂しいな。

そんな軽い気持ちで、ジュエリーボックスから適当に指輪を取り出した。いつもは着けない指に、なぜか無理やり通す。少しきつかったけれど、まあいいかと押し込んだのが間違いだった。

「やらかした」

石鹸をつけても、オリーブオイルを垂らしても、指輪はびくともしなかった。

それどころか、時間が経つにつれて指がじわじわと腫れてくる。ゴミ出しどころではない。なぜよりによって右手の薬指？ 赤黒く膨らんでいく指先を見て、さすがに血の気が引いた。これ、壊死するやつじゃない？

半分パニックになりながらA Iに聞いてみると、消防署で切ってもらえるという。薬にもする思いで近所の消防署に電話をかけ、そのまま向かった。



消防署に足を踏み入れるのは、生まれて初めてだった。

「こんにちは！ どうされました？」

「あの、さっき電話した指輪の…」

「あー！ 少々お待ちくださいね！」

受付に出てきたのは、人当たりの良さそうな爽やかな青年だった。清潔感のある短髪に、人懐っこい笑顔。差し出した右手の薬指を見せると、「うわ、これは大変だ」と眉を下げて、すぐに奥へ向かって声をかけてくれる。

「副士長〜！」

しばらくして、代わりに出てきたのは——さっきの青年とはまるで違う空気を

まとった男だった。

黒髪を無造作にかき上げた、彫りの深い顔立ち。世間ではこの顔つきを、イケメンと言うのだろう。だが、目つきは獲物でも品定めするみたいに鋭く、腕を組んでこちらの指をじろじろ見てくる。

「ああ、これはひどいな」

低い声で、彼は片手で私の手首を軽く掴むと、もう片方の手でリングカッターを取り出した。指先が思ったより熱い。いきなり触れられて心臓がどきっと跳ねる。

「動くなよ」

「痛いですか？」

「動かなきゃ痛くねえよ」

ぶつきら棒に答える彼。刃が指輪の内側に沿って差し込まれる感触に、思わず息を止めた。彼の指は骨ばっていて、それでいて驚くほど繊細に力を加減している。皮膚に刃先が触れることは、一度もなかった。

「…これ、彼氏からもらったやつ？」

作業をしながら、彼がふと聞いてきた。何気ない世間話のつもりなのだろう。

「違います。自分へのご褒美で、自分で買いました」

「はあ？ 右の薬指にハメてんのに？ 男がいる場所だからって色気付かなくてもいいんだぜ？」

「…はい？」

彼は手を止めないまま、片方の眉を上げた。口の端がわずかに持ち上がっている。そんなつもりは毛頭なくて、カチンと来てしまった私は少し強めに言っ

まう。

「急いでていつもと違う指に着けてしまったんですぅ!!」
「そうか」

そこで彼は小さく笑った。笑うと目元の険しさが少し和らいで、それが余計に癪に障った。

「お前、アホだな」

「は？」

「普通、確認して付けるだろ。」

ぐうの音も出ない私とは裏腹に、パチン、と小気味いい音がして、指輪が真つ二つに割れる。呆気ないほど一瞬で、彼は割れた指輪をトレーに乗せた。

「ありがとうございました…」

「おー、次から気をつけろよ」

彼はふっと鼻で笑って、それ以上何も言わなかった。名前も聞かれず、聞きもせず、私はそのまま消防署を後にした。腫れた指先をさすりながら、心の中で「なんなのあの人」と何度も繰り返す。感じが悪い。イケメンなのに性格歪んでたらダメよね！ はー、イライラする！ 今日飲んでやるんだ！ などと思いながら指定された居酒屋へ向かった。



雑居ビルの三階にある、和風の居酒屋。今夜こそはと意気込んで臨んだはずなのに、いざ顔を渡すと、申し訳ないがこれといってピンとくる人がいない。

正面に座る男が、やたらと質問攻めにしてくる。自己紹介されたはずなのに目

の前の男の名前すら覚えてない。仕事は何をしているのか、休みの日は何をしているのか、彼氏はいるのか――。いる訳がなからう！ 愛想笑いという仮面を顔に貼り付けたまま、相槌だけを機械的に打つ。早く帰りたい。もう二軒目はパスして、家でアイス食べながらドラマの続き見よう。そんなことを考え始めた矢先、個室のふすまがガラリと開いた。

「悪い、遅くなった」

その瞬間、隣に座る綾香が私の腕を小さくつつき、ボソボソと話す。

「…ねえ、イケメンじゃない？」

「ほんと、びっくりする」

反対隣の子も、さらに小声で同調する。聞き覚えのある声に、私だけが嫌な予感で固まっていることなど、誰も気づいていない。

「多田おせーよ」

「すみません、仕事溜まってて。」

男友達が、彼の肩を小突きながら笑う。

「こいつ、いつも忙しいアピールすんだよなあ。ほら、自己紹介しろよ」

促されて、彼が一同を見渡す。私はその視線から逃げるように俯こうとした
——けれど、間に合わなかった。

目が、合った。

一瞬、部屋の空気ごと止まったような気がした。

「……お前」

自己紹介より先に、彼の口からその一言がこぼれた。

「なんでいるんだよ」

「それはこっちの台詞です」

隣の綾香やその知り合いはまだ「知り合いなの?」「どういう関係?」とひそひそ盛り上がっていて、私たちの間にだけ流れる剣呑な空気には誰も気づいていない。

「アホ、また会ったな」

「その呼び方やめてもらえます?」

「事実だろ、アホ」

「うるさい。もう黙ってください」

「え? なになに? 知り合い的な感じ? 多田ア、こんな可愛い子なんで紹介してくれなかったんだよ!」

空気を和ませようとする男友達を他所に、さらりと自己紹介をしていた。

「多田泉、三二歳。」

「多田ア、職業言えよ」

「別に言わなくてもいいだろ」

「コイツね、消防士やってんの。なんだっけ副リーダーだっけ。」

「消防副士長な」

「消防士!? やば、めっちゃかっこいいじゃないですかー!」

女の子たちが一斉に色めき立つ。さっきまでの微妙な空気はどこへやら、テーブルの温度が一気に上がった。同席している男達はやばい! と焦りの雰囲気漂浮させているが、当の本人は涼しい顔で座布団に腰を下ろすと、彼…多田はさすが店員を呼び止め、生ビールを注文する。

「なにに、二人お知り合いなんですか？」

隣の質問攻め男が身を乗り出して来る。私が答えるより早く、多田が口を開いた。

「指輪切ってやった仲」

「は？ 指輪？」

「こいつ、確認もせず指輪ハメて壊死しかけて署に來たんだよ、バカだろ」

「ちょっと、人聞きの悪い言い方しないでください！」

思わず声をあげると、テーブルがどっと沸いた。

「なんですかそのエピソード、初対面のノリじゃなくないですか二人とも」

からかうような視線が集まる中、多田は運ばれてきたばかりのジョッキを傾け

ている。その涼しい顔にまた苛立ちがぶり返した。この人、絶対面白がってる。そこから宴は、妙な構図で進んでいった。

「多田さん、休みの日って何してるんですか？」

「筋トレ」

「え、かっこいい！ 一緒に行ってみたいです」

「一人でやりたい派」

すげなく切り捨てられて、女の子は愛想笑いのまま固まる。それでもめげずに、次々と別の子が話しかけていく。連絡先を聞いても「別にいいけど、返信は遅い」、好きなタイプを聞いても「特にない」。塩対応にも程がある。それなのに誰も諦めない。むしろ塩対応であればあるほど、逆に火がつくタイプの子もいるらしく、テーブルの端では小さな争奪戦めいた空気まで生まれていた。

その一方で、脱落していく女の子たちを、すかさず拾っていく男たちがいた。

「ねえ、俺の話聞いてよ」

「多田より俺の方が話聞くタイプだから」

まるでハイエナだ。多田に振られた直後の隙を、正面や隣の男たちが逃さず狙っていく。誰かが撃沈するたびに、別の誰かがすっとその隙間に滑り込む。合コンというより、狩場みたいな有様だった。

私は終始その光景を眺めながら、ハイボールをちびちび飲んでいた。多田との一件を聞いて怯んだ男達には群がられず、誰も拾いに来ない。地味に地獄だった。

「お前は誘われねえの」

ふと、正面から声が飛んできた。多田が、面白がるような目でこちらを見ている。

「別にいいです。狩場に興味ないんで」

「強がんなって」

「見てて分かるでしょ、これ。あなたに振られた子を、みんなが拾ってるだけ。」

吐き捨てるように言うと、多田は喉の奥で小さく笑った。

「言うじゃん」

「事実なんで」

グラスの水が溶けて、カラン、と音を立てる。周りは相変わらず賑やかで、誰も私たちのやり取りになど気を留めていない。

「じゃあお前は、何しに来たんだよ」

急に真面目な声で聞かれて、一瞬言葉に詰まった。答えたくない。答えたら、

なんだか負けた気がする。

「……別に。友達に呼ばれたから」

「嘘つけ」

「嘘じゃないです」

「今日、絶対決めてやるって顔してたぞ、さっきまで。それにその服も気合い入れたみたいだな？」

心臓が跳ねた。なんでバレてるんだろう。愛想笑いの仮面、ちゃんと貼れてたはずなのに。

「……見すぎです」

「勝手に目に入っただけだけど」

「そういうアンタだってこんな所に来てるじゃないですか！」

「俺は数合わせで来ただけ。」

そう言いながら、多田の耳が、じわりと赤く染まっているのに気づいた。目元も心なしかとろんとしていて、さっきまでの余裕たっぷりな空気に、ほんの少し酔いが混じっている。

「なんか、赤くないですか」

「あ？　…いや、酒弱いだけ」

急に目を逸らして、水を一気に飲み干す。その仕草がなんだか妙に子供っぽくて、可笑しくなった。さっきまで散々からかわれた仕返しに、今度はこっちがにやける番だった。

「へえ、意外」

「うるせえ」

そんなやり取りをしているうちに、周りを見渡せば、酔っ払った男女がもう絡み合う一步手前まで来ていた。肩に手を回す男、頬を赤くして笑い転げる女。誰も彼もが、夜の勢いに任せて距離を詰めていく。

その光景をぼんやり眺めていたら、なんだか急に馬鹿馬鹿しくなった。何しに來たんだっけ、私。

「ちょっとお手洗い、行ってきます」

誰にともなく言って、私は席を立った。

私が席を立つと、気づけば多田の周りだけぽっかり空いていた。塩対応を貫いた末路がこれか、と思うと少し笑えた。当の本人は手持ち無沙汰にスマホをいじりながら、時折グラスを傾けている。誰かに絡まれるでもなく、絡むでもなく。ただ酔いに任せてぼーっとしているだけの、そんな空気だった。

私はその光景に背を向けて、ふらつく足取りで店を出た。ちょうど通りかかった店員を捕まえて、お手洗いの場所を尋ねる。

「すみません、お手洗いて…」

「あ、お手洗いは同じビルの店の外にございます。お店を出ていただいて、右手にイタリアンのお店がありますので、その前をまっすぐ突き当たりまで行っただくとございます。二つありまして、一つが女性専用、もう一つが男女共用です。あ、扉、ちょっと立て付け悪いんで気をつけてくださいね」

「ありがとうございます。」

軽い調子でそう説明されて、なるほど、と歩き出す。

思っていたより酔いが回っていることに気づいたのは、廊下を数歩進んだあたりだった。床がやけに近い気がするし、視界の端がふわふわしている。壁に軽く手をつけて体を支えながら、教えられた通りイタリアンレストランの前を通り過ぎ、突き当たりを指した。

角を曲がると、店員の言った通り、簡素な扉が二つ並んでいた。

女性専用の扉に手をかけると、中から小さく「あ、すみません、今入ってます」

と声がした。仕方なく隣の扉に向かう。共用、と札のかかった方だ。

「……まあ、いっか」

扉を押し開けると思ったより狭い作りだった。目の前にはむき出しの男性用便器がひとつ。その隣に仕切りで囲われた個室がひとつ。なるほど、これが男女共用ってことか。想像していたよりずっと簡素な造りに、若干ひるみながらも個室へと入り、用を足して、ふらつく頭のまま外に出ようと、扉のノブに手をかけた。

——動かない。

もう一度、力を込めて引く。びくともしない。押しても、横にずらそうとしても、扉は完全に固まったように動かなかった。

「……嘘でしょ」

酔いも一気に冷める思いで、何度もガチャガチャとノブを揺らす。店員の

「立て付け悪いんで」の一言が、今さら重くのしかかって、外側の扉がガチャリと開く音がした。最初のドアの鍵を閉め忘れていたようだ。

「……っ」

とっさに息を潜めていると鍵が閉められ足音がひとつ、無造作に入ってくる。男の人だ。個室の薄い壁越しに、ジー、というファスナーの音が聞こえて、一気に顔が熱くなった。まさかこのタイミングで誰か来るなんて。

「はあ……」

聞き覚えのある、気の抜けたため息。

——嘘でしょ。

その声には、聞き覚えがあまりすぎた。

多田は用を足し終えたと、手を洗って、もう一度ため息をついた。どうやら酔っているらしく、息が荒い。舌打ちをすると、個室のドアをガチャガチャと揺らしてくる。

「入ってます」

「あー、アホか」

「その呼び方やめてください」

「隣のトイレ行かなかったのか？」

「空いてなくて。出て行ってください」

「…そうか。酔いが回ってて座りたいから退いてくれねえか」

「…こっちのドア開かないんです」

「……」

すると、ドアの角を軽く叩いてガチャガチャと扉の向こうで何かしていた。

「鍵開けてみる」

言われるがまま鍵を開けると、すんなりドアが開いた。

「あ……」

気まずい沈黙が流れる。しっかり鍵をかけていたつもりが、どうやら最初から掛かっていなかったらしい。ノブが引っかかっていただけで、押せば普通に開いたのだ。

「……お前、それ、ただの勘違いじゃねえか」

「うるさい。酔ってたんです」

顔が熱くなるのを誤魔化すように、そそくさと個室を出ようとする。けれど入

れ替わりで多田も個室に入ろうとして、狭い空間で肩がぶつかった。

「…悪い」

「いえ」

謎の気まずさを抱えたまま、私は共用トイレを出て、来た道を戻ろうと外側の扉に手をかけた。

——動かない。

何度引いても、押しても、扉はびくともしなかった。

「……嘘でしょ」

背後で、鍵も閉めずに座って体内のアルコールを抜こうと大きく息を吐いてい

る多田はこちらの様子に気づいた。

「どうした」

「開かないんです、これ」

多田はこちらに来てドアを押したり引いたりしている。

「…マジで開かねえ」

狭いトイレの中に、酔った男女が二人。逃げ場のない現実が、じわじわと肌にのしかかってきた。

多田がもう一度、ドアノブを掴んで力を込めるが、結果は同じだった。眉間に皺を寄せて、もう一度、今度はさらに強くガチャガチャと揺らす。

がこっ…

やけに鈍い音がして、多田の手の中に、ノブごと取れたパーツが収まっていた。

「…は？」

「……」

お互い、しばらく無言でそのパーツを見つめる。多田がゆっくりと扉に向き直り、丸い穴が開いただけの扉を指で押してみるが、当然びくともしない。むしろ、取っ手を失ったことで、押すことすら難しくなっていた。

「お前、これ……」

「壊したの、あなたですよね」

「いや、ガチャガチャしてたのはお前も同罪だろ」

「私は最初、軽く引いただけです！」

言い合いながらも、状況の深刻さがじわじわと押し寄せてくる。狭いトイレの中、扉は開かず、外に助けを呼ぶ手段もない。おまけに相手は、よりによってあの多田だ。

「…これ、詰んだ？」

「詰みました」

多田が壊れたノブを手のひらで弄びながら、ふっと笑う。その笑い方が、消防署で見たときと同じで、なんだか無性に腹が立った。

「消防士のくせに、閉じ込められてどうすんですか」

「うるせえ。俺は火を消す係で鍵屋じゃねえんだよ」

そう言い合って、はたと我に返る多田。

「……携帯は」

「あ」

聞いた瞬間、二人して同時に固まった。バッグの中を探ろうとして、ようやく気づく。手ぶらで来たトイレだ。財布もスマホも、全部置きっぱなしだった。

「お前、持ってねえの」

「持つてゐるわけじゃないでしょう！ そっちこそどうなんですか！」

「テーブルの上」

つまり、二人揃って丸腰。助けを呼ぶ手段が、綺麗さっぱりない。

「……最悪」

「ま、そのうち誰か来んだろ」

会話が途切れて、狭いトイレの中に沈黙が落ちる。どうすればいいのか、正直まったく分からなかった。

やがて多田が諦めたようにため息をつく、個室に入って便座の蓋の上にとかつと腰を下ろした。酔っているせいか、動きがどこか雑だ。両手で自分の顔を数回パンパンと叩いて、もう一度深く息を吐く。

私も座りたい。座りたいけど、床に直接座るのは嫌だし、かといって壁に寄りかかるのもなんだか気が引ける。結局、その場でしゃがみ込むことにした。

「…なんだよ、お前も座りたいのか」

しゃがんだ私を見下ろして、多田が片方の口角だけ上げる。

「座りたきや俺の膝の上、空いてるけど」

半笑いの顔でそう言われて、一瞬何を言われたのか理解が追いつかなかった。

「絶対嫌、そんな所座りません」

「冗談だって。そんな睨むなよ」

言葉とは裏腹に、その目はまったく冗談を言っている顔をしていなかった。

しゃがんだ姿勢のまま数分。じわじわと太腿が悲鳴を上げ始めて、酔いも相まって視界がぐらぐらしてくる。床に座るのは嫌だと思っていたはずなのに、もうそんなことを言っていられないくらい、足がふらついていた。

「…なあ、いつまでしゃがんでんの」

「限界です、もう」

「だから言っただろ、膝の上」

「絶対嫌って言ったじゃないですか」

「じゃあそのまま床でも転がってろ」

売り言葉に買い言葉で睨み合ったものの、次の瞬間にはぐらりと体が傾いていた。酔いのせいで、力の加減がまるで利かない。地べたに座り込むよりはマシだと、酔った頭が勝手に判断したらしい。

気づいたときには、多田の上に、ちょこんと収まっていた。

「…」

「言ったそばから、これかよ」

呆れたような、でもどこか楽しそうな声。振り返る気力もなくて、私はそのまま多田の胸に軽くもたれかかった。職業柄なのか、多田は私のお腹の前で腕を組み、しっかりと抱えるようにしている。狭い個室に密着した体温、換気扇の音だけが響く沈黙。

「酔ってるだけです。床よりマシってだけで」

「はいはい」

否定する気力もなく、私はそのままの体勢で目を閉じた。多田の心臓の音が、思ったより速く鳴っているのが分かった。

沈黙に耐えかねて、ふと思いついたことを口にしてみる。

「消防士って、実際どうなんですか。テレビとかで見る感じ、大変そうですけど」
「まあ、大変。けど思ってるのと違うと思う。たぶん」

意外にも、多田は真面目に答えてくれた。

「実際、現場行ってる時間より、その前後の方が長いんだよな。装備の点検とか、訓練とか。まあ、その方がいいんだけどな。あとは…救急要請の方が圧倒的に多い。」

「救急も行くんですか？」

「救急隊とは別だけど、現場によっては一緒に動くこともある。…まあ、正直し

んどいのは、助けられなかった時だな」

その一言だけ、声のトーンが落ちた。私は何も言えず、ただ黙って続きを待つ。

「別に、深刻な話するつもりねえから、そんな顔すんな」

「してません、そんな顔」

「してた」

「見えないくせに」

言い返した瞬間、顎を軽く掴まれて、無理やり多田の方へ向かされ、至近距離で目が合う。

「見えてんだよ」

さっきまでのからかうような口調とは違う、少し本気の色が混じっていた。心

臓が跳ねて、それを誤魔化すように視線を逸らそうとしたけれど、顎を掴む指の力は緩まなかった。

「……離してください」

「嫌だって言ったら？」

さっきまでの余裕たっぷりの態度とは違う、ふとした瞬間の素の表情が見えた気がした。すると手をぱっと離して言葉を紡ぐ。

「…お前は。合コン、本気で来たって言ってたけど、なんでそんな焦ってんの」

急に矛先がこちらに向いて、心臓が跳ねる。膝の上、密着したままの距離で聞かれると、逃げ場がなかった。

「…別に。焦ってなんかいいです」

「周りが結婚やら出産のおめでたムードで焦ってたんだろ？」

図星を突かれて、余計にむかつとした。人の内面を勝手に読んで、面白がっている。

「あなたには関係ないです」

「まあな」

あっさり引き下がられると、それはそれで腹が立つ。話をはぐらかしたくて、目の前にある多田の腕に視線を移した。シャツの袖から覗く前腕は、思っていたより筋張っていて、血管まではっきり浮いている。

「…筋肉、すごいですね」

深い意味もなく、ただ話を逸らすつもりで呟いた言葉だった。それなのに、指

先が勝手に動いて、多田の腕にそっと触れてしまう。想像していた以上に硬くて、思わず二度、三度と力を確かめるように押してしまった。

「…お前、それわざとやってる？」

急に低くなった声に、はっとして手を止める。見上げると、さっきまでの余裕たっぷりの笑みが、少し違う色を帯びていた。

「な、なんでもないです、今のは」

「今さら遅い」

低く笑って、多田の手が私の手首を軽く掴んだ。逃げようとしたけれど、酔った体はうまく力が入らなくて、ほとんど抵抗にならなかった。

「細え手首してんのな。…あー、クソっ…」

そう呟く多田を不思議そうに思っていると、私のお尻に、固いものが当たる感覚があった。

最初は酔いのせいだと思った。膝の上に座っているだけで、こんなに熱くて硬いものが自分の身体に押し当たってくるなんて――。でも、間違いようがなかった。ポトムスの下で明らかに反応している。

「…あ」

小さく声が漏れた瞬間、多田の腕が私の腰をぐっと引き寄せた。後ろから包み込むように抱きしめられて、逃げられない距離。首筋に多田の吐息がかかるほど近い。

「気づいたか」

「わざとじゃ…ないです」

「嘘つけ。さっきから腕触って、身体寄せてきて、今さらかよ」

指先が腰骨をゆっくりなぞる。力は強くないのに、逃げる隙間を与えない。狭い個室の中で、換気扇の音だけがやけに大きく聞こえる。

自分の体温より熱いその存在を生地越しにはっきりと感じてしまい、恥ずかしさと、それ以上の何かが熱く湧き上がってくる感覚に思考がぐらりと傾いた。

「……酔ってるだけです」

「俺もだ」

多田はそう言って、私の顎を軽く摘まんだ。肩越しに振り向かされて、再び至近距離で目が合う。黒い瞳の奥が、さっきまでの余裕を少しだけ溶かしている。酔っているせいか、それとも――。

「酒も水もねえし、逃げ場もねえ。しかも、お前が煽ってきた。だったら、遠慮

する理由がどこにある」

「煽ってなんか……」

「腕触って、身体寄せてきて、膝の上乗っかってきたのは、どこの誰だよ」

言葉に詰まる。反論の余地が、悔しいくらいになかった。

「お前がこうさせたんだ。文句言うなら、最初から乗ってくんな」

そう言い切ると多田は答えを待たずに、振り向かせた私の顔に唇を重ねた。

横向きの、無理な体勢のままのキス。最初は軽く、探るような感触。すぐに、もっと深くなる。舌先が唇を割って入り込み、息を奪っていく。指輪を切っていたときと同じ指が、驚くほど繊細に力を加減しながら、私の頬を支えていた。

「ん……っ」